

有明に隔へだつる海のなかりせば
駿河の桜如何いかに愛めでらむ

令和四年三月二十六日

大中臣正比呂



桃の節句が過ぎると、直ぐに桜の季節だ。夜明け前の有明海に月は残り、
鳥賊釣いかり船の灯りだけが微かに「海はつながっているよ」と囁く。

遠い地に居ては富士見の里の彼の女ひとをどうして愛したらいいのだろうか。
大伴家持おとものやかもちに聞くべきか、在原業平ありわらのなりひらに教えを請うべきか。モー、寝よつと。